－付論－

中・四国地方出土の軽石

1. はじめに

旧練兵場遺跡柱穴遺構から軽石が一点出土した。遺跡は瀬戸内海から約5km離れた位置にあり、海岸に漂着した軽石を人が意図的にこの場所まで持ち帰ったことが想定される。は二層に分層され、上層からは古墳時代後期の須恵器が出土し、下層からは弥生時代後期の土器片が出土した。軽石は上層より出土した。この軽石は弥生～古墳時代の「道具」であると考えられる。

軽石は、火山大国日本ではごく普通に見られる岩石の一つである。火山から噴出した溶岩が急激に冷却される際に、含有されたガスが噴出して多孔海面状となったものである。別名を浮石といい多くは水に浮く。海流に乗って、長い距離を漂流し海岸に打ち上げられるため、火山活動が盛んな南九州や東京湾周辺地域では軽石も豊富に存在し、また漂着によって火山が近辺に存在していない地域にも軽石は存在している。我が国においては、古くは縄文時代以来、人は軽石を生活のための材として利用することを知っており、その伝統は現在の足の裏こすりのために風呂場などに置かれる軽石製砥石にまで脈々と連なっている。

考古学では軽石を出土遺物として積極的に評価し、資料化している地域とそうでない地域があり、認識度にはばらつきがある。例えば、南九州・鹿児島県では大量の軽石が現在も散布しており、道具としての利用率もかなり高く、これが遺物に転じて出土する場合は多い。また、通称「石なし県」と呼ばれれ、県内に石器用石材原産地のない千葉県では、遺跡内から出土する石については慎重に検討されており、この地においては出土軽石は使用痕の有無に関わらず遺物として立派に報告されている。

では、火山の存在していない中国・四国地方では軽石に対する認識は、どのようになされているのであろうか。出土資料の集成を通じて考えてみたい。

2. 軽石の用途

近年、前述した軽石を遺物として積極的に評価する地域ては、軽石の個別具体的な報告や検討がなされるようになってきた。しかし、時間軸を長く取りその用途にまで言及した研究はほとんどされてこなかった。唯一、軽石の様々な用途を想定した研究に、大賀秀実の関東地方出土の資料を検討したものがある（大賀 1995）。大賀はこの中で十五の軽石の用途を想定している。軽石研究に注意を喚起するために、以下少し長くなるが引用しておきたい。1浮子、2木製品の加工段階での仕上げ砥石、3土器製作において曲面部分を研磨する調整具、4有溝軽石を骨角器の製作に供したもの、5皮などの製品を仕上げるための滑し道具、6金属製刃物用の砥石、7矢柄研磨器、8石製模造品の製作工程での粗い研磨用、9金属器のロウ付け用具、10石偶、11容器、12装飾品、13玉、14構築材、15土器胎土混和剤

大賀のあげた用途以外にも、南九州などでは石塔や石棺、地下式横穴の閉塞石などにも軽石は使用されている。まだまだ軽石の使用例はありそうだ。

3. 中・四国出土の軽石

今回の資料収集した結果は、管見では次のようになる（Fig.44・45、Tab.1）。中国地方では、16遺跡から41個

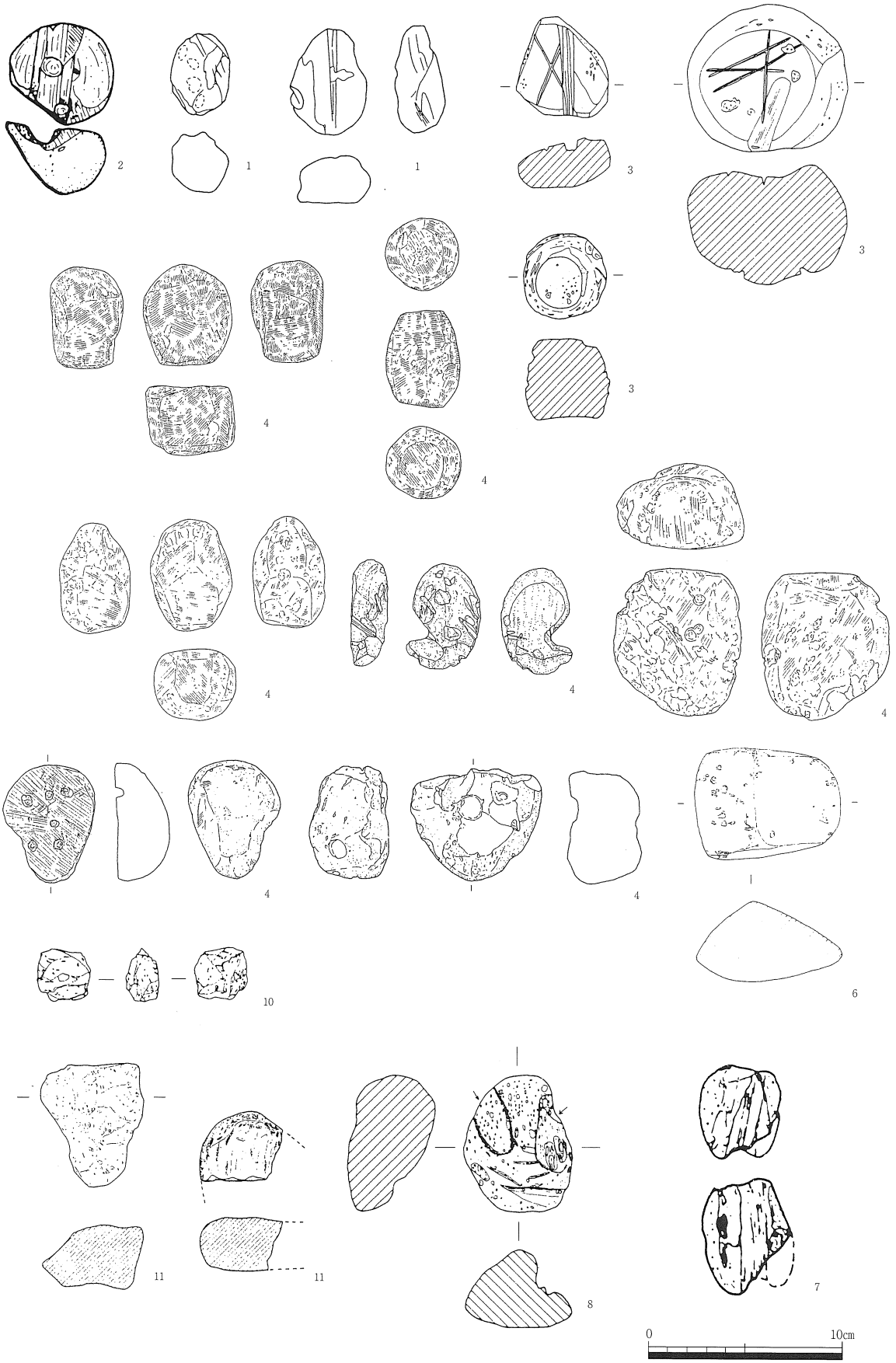

Fig.44　中・四国地方出土の軽石集成（1）（各文献より、NoはTab.1に同じ）

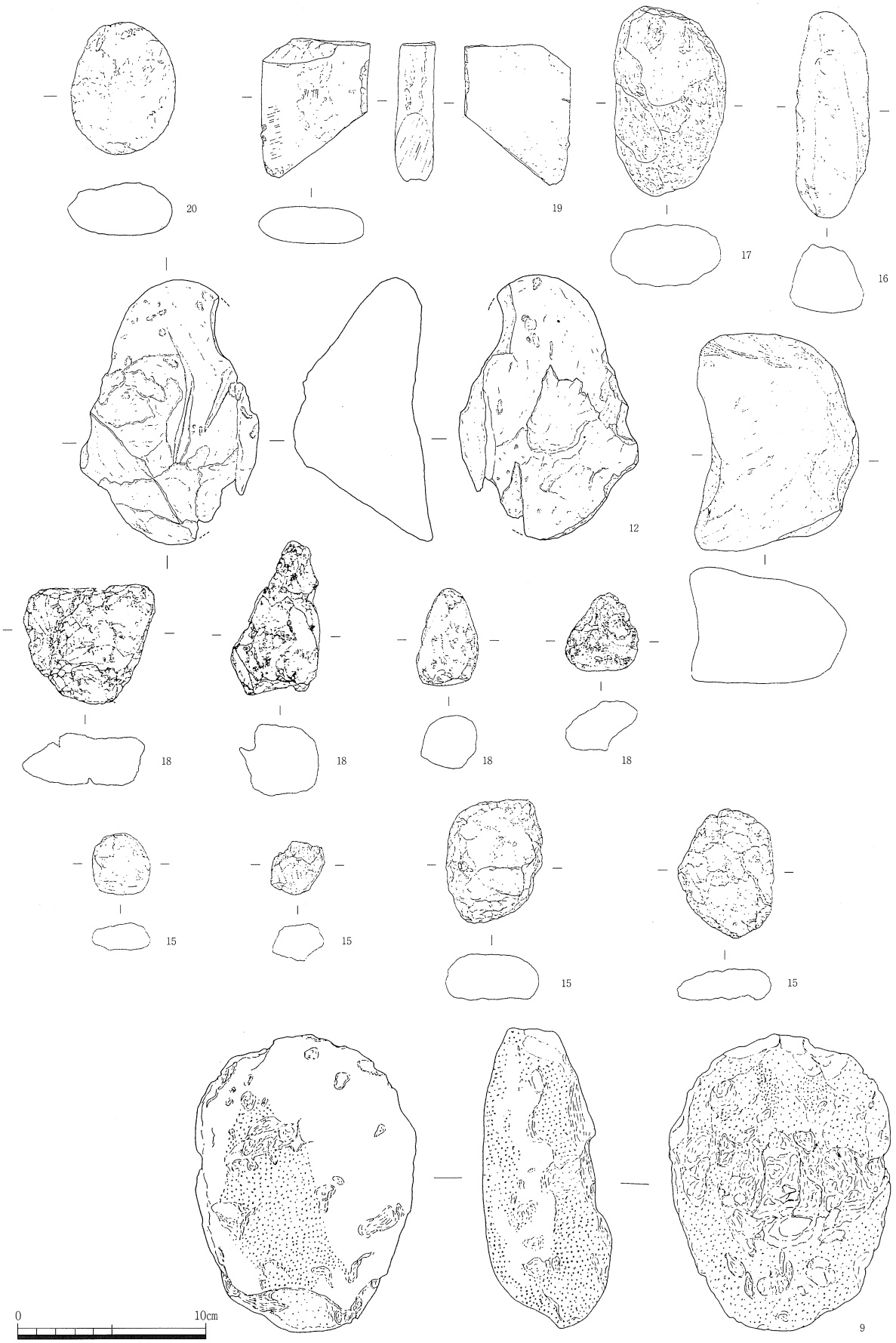

Fig.45　中・四国地方出土の軽石集成（2）（各文献より、NoはTab.1に同じ）

Tab.1　中・四国地方出土軽石一覧

No.	遺跡名	所在地	出土遺構	時期	数量	文献
1	湖山第一	鳥取県鳥取市	遺構外		2	原田ほか 1989
2	青木	鳥取県米子市	FSI42	弥生終末	1	清水ほか 1976
3	長瀬高浜	鳥取県西伯郡羽合町			3以上	(財)鳥取県教文財団編 1983
4	青谷上寺地	鳥取県気高郡青谷町	包含層	弥生後期	7	北浦ほか 2001
5	綾羅木郷	山口県下関市	袋状竪穴	弥生前期	4	水島ほか 1981
6	草戸千軒町	広島県福山市	SK3635	14C中～後	1	福島 1994
7	上東	岡山県倉敷市	H-8	弥生後期	1	葛原ほか 1974
8	御堂奥	岡山県倉敷市	溝		1	葛原ほか 1974
9	宮前川北斎院	愛媛県松山市	遺物廃棄遺構	弥生後期	1	作田ほか 1998
10	斎院烏山	愛媛県松山市	東端一括	弥生後期	1	作田ほか 1998
11	糸大谷	愛媛県今治市			2	竹本ほか 1996
12	旧練兵場	香川県善通寺市	SX128	弥生～古墳	1	本報告
13	大毛島第22区	徳島県鳴門市	SK-01	近世以降	1	松永 1983
14	田村西見当	高知県南国市	貯蔵穴	弥生前期	2	岡本・広田 1976
15	田村遺跡群	高知県南国市	SK6	弥生前期	4	森田 1986a
16	田村遺跡群	高知県南国市	ST3	弥生中期	1	廣田 1986
17	田村遺跡群	高知県南国市	ST6	弥生中期	2	廣田 1986
18	田村遺跡群	高知県南国市	第Ⅲ層	14～15C	4	森田 1986b
19	田村遺跡群	高知県南国市	SR2	弥生中末～後初	1	下村 1986
20	早咲	高知県幡多郡大方町	SB-1	10C	1	廣田 1991

以上が出土している。一遺跡からの出土量が多い事例として、田村遺跡群からの12個がある。、鳥取県気高郡青谷町青谷上寺地遺跡では7個、山口県下関市綾羅木郷遺跡の4個、鳥取県東伯郡羽合町長瀬高浜遺跡3個以上と続く。しかし、それ以外の事例は一遺跡から1・2個程度である。結果として、太平洋側と日本海側に多く香川県ではこれまで報告例がないようで、旧練兵場遺跡がはじめての事例となるものである。

軽石は形状はほとんどが自然のままの状態であるが、青谷上寺地遺跡例のように加工して形を整えたもの、鳥取県米子市青木遺跡例・岡山県倉敷市上東遺跡例などのように中央部に深い溝が施されるもの、長瀬高浜遺跡例や鳥取県鳥取市湖山第一遺跡のように、器面に浅い溝か数状認められるものなどがある。これらの用途は前述した順に祭祀具、浮子、砥石が想定されよう。

4. おわりに

太平洋側では黒潮に、瀬戸内海西部では豊後水道に、東部では紀伊水道に、日本海側は対馬海流にそれぞれ乗って軽石は漂着するものと考えられる。前述した軽石の出土が日本海側と太平洋側で多いことに海流は無関係ではないだろう。これらの四つのエリアに漂着する軽石の原産地が果たして同一なのか異なっているのか、異なっているとすると、どの程度の割合でどこの産地からどういった経路で漂着するかなど、興味は尽きない。軽石の原産地についても蛍光X線分析など理化学的な検討をおこなえる可能性が高いようであり（森ほか 1992)、今後出土軽石についても試みていく必要があると思われる。

ここで旧練兵場遺跡出土軽石に立ち返ってみると、瀬戸内海に面した旧練兵場遺跡周辺の人にとっては軽石は身近な「石材」であったと考えられる。本遺跡出土軽石の用途としてはサイズが片手に収まる程度であること、表面に「V」字溝が認められることなどから粗砥的な砥石が想定されよう。いずれの県も海に面している中国・四国地方では、島根県を除く多の県では遺物として認識されているようである。報告された資料によれば、少なくとも弥生時代には「石材」として認知され、海岸などに打ち上げられる軽石を必要に応じて採取し、集落内へと持ち込まれ「道具」として利用して来たと考えられる。このような限りなく自然遺物に近い資料からも、遺跡調査の際の担当者の認識によっては、様々な情報が引き出せる可能性を秘めていると思う。

【引用・参考文献】

石井 忠 1986『漂着物事典』 海鳥社

大賀秀実 1995「軽石製品について」『高島平北』 都立学校遺跡調査会

岡本健児・広田典夫 1976『高知県田村西見当遺跡区の発掘』 南国市教育委員会

北浦弘人ほか 2001『青谷上寺地遺跡』3 （財）鳥取県教育文化財団

葛原克人ほか 1974『山陽新幹線建設に伴う調査』Ⅱ 岡山県教育委員会

（財）鳥取県教育文化財団編1983『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書』Ⅵ （財）鳥取県教育文化財団

作田一耕ほか 1998『斎院・古照』 （財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

清水真一ほか 1976『青木遺跡発掘調査報告』Ⅰ 鳥取県教育委員会

下村公彦 1986「Loc.36A」『田村遺跡群 第5分冊』高知県教育委員会

竹本英樹ほか 1996『糸谷大谷遺跡』 （財）愛媛県埋蔵文化財調査センター

中西弘樹 1999『漂着物学入門』 平凡社

原田雅弘ほか 1989『湖山第1遺跡』 鳥取県教育委員会・（財）鳥取県教育文化財団

廣田佳久 1986「Loc.34A」『田村遺跡群 第4分冊』 高知県教育委員会

廣田佳久 1991『早咲遺跡』 大方町教育委員会

福島政文 1994「4 石製品」『草戸千軒町遺跡発掘調査報告』Ⅱ 広島県教育委員会

松永住美 1983『徳島県文化財調査概報 昭和56年度』 徳島県教育委員会

水島稔夫ほか 1981『綾羅木郷遺跡』Ⅰ 下関市教育委員会

森 慎一・山下浩之・五島政一 1992「相模湾に漂着した小笠原・福徳岡の場海底火山起源の軽石」『自然と文化』15 平塚市博物館

森田尚宏 1986a「Loc.16」『田村遺跡群 第2分冊』 高知県教育委員会

森田尚宏 1986b「Loc.4」『田村遺跡群第6分冊』 高知県教育委員会